

川暮色

芝木好子



文藝春秋

すみだ がわばしよく
隅田川暮色

昭和五十九年三月十五日 第一刷

著者 芝木好子

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話代表(〇三)二六五―一二一

印刷所 大日本印刷
製本所 矢嶋製本
定価 一五〇〇円

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

© Yoshiko Shibaki 1984

Printed in Japan

隅田川暮色

装
丁
江
見
絹
子

地下鉄の長い通路をぬけて雷門口の階段を上ると、地上はまぶしいほど明るい。夏の日の午下の大地はぎらぎらして、目の前の大通りの商店がかげろうの中でゆれて見える。人影が絶えて、物音もしない。冴子^{さえ}は立止って目を凝した。

戦災で焼けて瓦礫の町になってしまった浅草へ、彼女はほとんど来ていない。空襲で自分の家も、格調のある古い町も失ってしまったので、かげろうの中の町がよそらしく、安直に見える。それでも月日がたてばそれなりの歴史になって、かげろうの中でゆれている。彼女は大正末年の生れで、その時三十五歳であったから、昭和三十五年の夏である。通りに目をあてていると、人が歩きはじめ、バスが走り、町の雑音が聴えてきた。町は呼吸しているが衰えを感じる。右へゆくと雷門で、左へゆくと隅田川にかかる吾妻橋である。彼女は麻のきものに白いバラソルをさして橋の方へ歩いていった。二、三日前、山谷堀で紺屋^{こや}を営む小磯元吉の店へ電話をした。電話口へ出たのは俊男である。戦後初めてのこと、忘れたとも思わないがどんな応対をするか不安であった。

「小磯さんですか。こちらは山村冴子です」

相手は言葉の途中から分つたとみえて、

「しばらくですね」と自然な声で言った。

「そう、十五、六年になりますかしら」

「変りましたか」

「それは、十五、六年分惻口になりましたわ」

俊男は苦笑する。歳月をとびこえて、お互いの調子が変わっていなかった。頼みたいことがあるが、訪ねてもよいかと聞くと、こちらから出向きましょうか、と俊男は言った。

「久しぶりに隅田川を歩いてみますから。隅田公園を真直に行けばいいのでしたね」

「吾妻橋まで迎えに出ましょう」

時間を決めると電話は切れた。遠慮をしてもはじまらない、冴子はそう思ったのだった。

久しぶりに吾妻橋のたもとにいくと、俊男はまだ来ていない。橋の手前は水上バスの発着所なので、向い側へいって川の下流へ目をやった。吾妻橋の次は駒形橋で、彼女の家は嘗てその近くにあった。絶えて浅草へ来なかったのは自分から捨てた場所で、今は家も父母も失ったからである。気がつくとも橋の向うに俊男が来ていた。白い開襟シャツの彼は真直こちらへ歩いてきた。飾らない、すこやかな落着いた感じは以前のままで、歳月を越えても違和感はなかった。

「いらっしゃい。珍しいこともあるんですね」

俊男は少し眩しそうに彼女を迎えて、女の変わりようをたしかめている。

「浅草へは時折来ますか」

「いいえ、何年ぶりでしょう。駒形も変りました」

「旧い店はなくなりましたね。残っているのは『どぜう屋』くらいでしょう。歩いてみますか」

ひとりでは歩く元氣もないが、俊男がつきあってくれるなら、と思った。

駒形橋は近くで、橋の際に駒形堂がある。その先の横通りは川を背にして下町らしいしつとりとした家々が並んでいたものだが、戦禍にあつてしまい、今はバラックまがいの家ばかりである。「ここらですね」と俊男は立止った。

冴子の父の店は雷門を田原町寄りに一つ入った通りにあつて、丹後の白縮緬をおもに商う呉服問屋であつたが、冴子が小学二年から喘息をわずらつたので、父の千明は幾分でも静かなところを、と川岸を住いにしたのだった。家と家の間に川が見えることしか昔をしのぶものはない。ゆつくり歩いて、引返すと、橋の際へ戻つた。昔この場所から冴子は子供の喧嘩を見たことがある。「俊男さん、ここで子供同士の大喧嘩をしたことはないかしら」

「さあ、覚えていませんね」

駒形堂の前へ十人あまりの子供が勢揃いしてやつてきたのだった。男の子が大半で、女の子もまじつていた。駒形堂は小さな無人の堂で、まわりにささやかな境内がある。そこにいた七、八人の子供が一斉に立上つて身構えると、殺氣立つて互いになにかわめきはじめた。向うからきたのは花川戸あたりの子で、こちらは駒形の子に見える。冴子は俊男に似た子を見た氣がした。集団の子供は互いに手を振り、大口をあけて罵りあい、甲高い声がのろしのように上つた瞬間、掴

みあいが始まっていた。それはすごい熱気につつまれて、戦争ごつことも見え、棒きれを振りまわす子もいた。往来からばらばらと大人たちが駆けよってきたが、半分遊びにおもったのか、それとも危くて手に負えないのか、誰も止めない。冴子は俊男を目で探したが、足が竦んで動けなかった。子供と子供の格闘はスポーツに似ているが、悲鳴があがると、異様さが漂った。交番から巡査が走ってくると、子供は勘で分るのか、忽ち喧嘩を中止して素早く四方へ散っていった。

あとに鼻血を出した男の子が伸びていて、近所のおかみさんがちり紙を与えた。巡査は顔に血をしたたらせた男の子をつれて交番へ引揚げてゆき、見物人も歩きはじめた。

その時、冴子の目に電車通りを越えてこちらへ歩いてくる父の姿が見えた。いつも結城のきもの着流しに角帯をしめた千明は、上背があつて姿の良い男で、動作もきびきびしている。寄つてくるなり、言った。

「冴子、子供の喧嘩だって。大勢か」

「十人くらいずつ。一人が鼻血を出した」

「惜しかったな」

千明は思わず言った。おもしろい見ものを逃した、という顔をした。

「俊男さんと似た子がいた」

「俊男はいないさ。子供のくせに分別くさくて、喧嘩になど入るものか」

千明は冴子が子供の争いに脅えたままの沈んだ表情なのをみて、どうした、と聞いた。彼女の喘息は渺々しくなく、発作は年々繰返しやってきて、良くなる気配はなかった。このままでは女

学校へ進むこともおぼつかなかった。友達に咳がうつるといつて来なくなったし、勉強も遅れがちで、自分でもどうしてよいかわからない虚ろさがある。喧嘩する子供たちのみなぎるエネルギーに圧倒されると、みじめになる。千明は子供の気持ちを思いやりながら、歩きはじめた。彼も喧嘩に加わるほど冴子がすこやかなら、と一瞬思うのだ。

駒形の家は横通りの黒板塀の門から玄関まで一跨ぎのうちで、奥座敷は小さな庭に面して、うしろは川であった。庭の端の木戸は締めてあるが、石段を四、五段降りると川で、上げ潮になると、たつぷ、たつぷ、と石段を打つ水音がした。千明はこの家が気に入って子供が二階で寝ていようと、遊び仲間と句会を持ったり、麻雀の卓を囲んだりする。牌に興じているとおもうと、急に耳を立てて二階で咳込む声を聴いている。冴子の母のやよいは彼のあそび好きを、お父さんの道楽病、とよんでいた。千明は茶道の名を持っていて、その関係の人たちに頼まれるときもの意匠をつくる。若いころ画家を志したがディレタントに終って、後には趣味をかねて絵を描き、下絵も描いた。二階の川に向って二つの座敷の一方に毛氈を敷いて絵筆をとる。隣り座敷で冴子は寝ている時、熱中した父が絵筆を唇へ含むために唇が色づくのを見ていた。そのうち子供の目に気付くと千明は呼んだ。

「冴子も描くか」

紙と小皿の中の絵の具を使わしてくれる。彼女は紙に川を描き、左手に橋を描いた。橋は円形のアーチのある駒形橋で、川にはだるま船が浮ぶ。船は荷を積んでいるが、舳先に船頭が立ち、船尾に女らしいのが坐っている。女はなにをしているか、千明には分らない。

「こりゃあ、なんだい」

「御飯を炊いてるの。これは七輪」

女は細い首を伸して四角い七輪の鍋を見ているらしい。千明は華やかな衣装の下絵のとなりで、わびしいだるま船の夫婦をみている子供に胸を衝かれた。

「だるま船の男は艀を漕いで、何処まで行くのかな」

「知らない。東京湾へ出て、消えてゆくって」

細い首の女を乗せた船は、冴子の萎えた心の幻想かもしれない。

橋の上に俊男と並んで立つと、冴子は知らぬ間に過去へ還ってしまう。その頃友達と言えば同い年の俊男しかいなかった。

「私の子供のころは喘息で、つらくて」

「あの時分、冴子さんを一目見ると喘息の具合が分った」

と俊男も答えた。冴子の喘息は良くなるきざしもなく、冬はとりわけ鬼門であった。冴子のは気管支性で空気の微妙な変化にも痙攣を起して呼吸をはばまれ、喉は破れた笛のように悲鳴をあげる。父が彼女を抱え、母は医者をおびに人を走らせる。誰もいない真昼の発作の時もある。彼女より七年あとに弟が生れて、母も子守もそばにいないこともある。二階の蒲団の上で火を噴きながら、地獄を見る。

冴子はいつも俊男の来るのを待っていた。彼は下職の紺屋の一人息子で、彼の父親の小磯元吉を千明は元さんと呼んで創作の仕事の片腕にしていた。一枚の藍の段染めの模様二人は火花を

散しあう仲でもあった。元さんが仕事を納めにくると、店の者も緊張する。二人は奥で仕上りを確かめあい、よろこんだり、腕組みしたりする。紺屋の用足しに小学生の俊男が来ることもあった。彼は父の仕込みで小学四年から洗い方を手伝い、張り板に布を掛ける下仕事も手伝った。木綿の風呂敷に届け物を包んできて、店の上り櫃かまちに掛ける。店と奥の間に小さな坪庭があつて、わきの廊下から千明が足早に出てくる。使いの少年のそばへきて、

「ゆうべ、おやじさんは荒れたか」

と聞く。元吉は仕事が気に入れないと腹を立てて、大酒を飲むのだった。俊男が正直に頷くと、にやにやして、

「そうかい。帰りに駒形へ寄っておいで」

と駄賃を渡す。昼間は小女と二人きりの影の薄い子を思いやるのだった。

俊男は駒形の家へくると、少年らしく階段を弾んだ足音で上ってゆく。冴子は冬はローズ色のセーターに着ぶかれて、湯気の立つ火鉢の前について俊男を見上げる。具合の良い時は宿題を見たり、互いの学校の話をするが、一目でいけない、と感じるときもある。冴子は喋り始めると忽ち喉をせえせえ鳴らして、身をもんで涙と唾液で顔をくしゃくしゃにするのだった。冴子は男の子の前で体裁を繕うとしなくなった。はじめな姿を見せてもどうということもなくなった。病氣も三年続くと子供なりに死の淵が見えていて、俊男はそれを助けられない。

「ぜんそくの度に心臓が弱ってゆくから、もう運動は出来ないって」

冴子は医者のもらした言葉を聞いていた。

「夏、うちの前の川舟に乘せてあげるよ」

俊男の慰めを払いのけるように、彼女は親にも言わない言葉を吐いた。

「庭木戸の鍵をお母さんが持っているけど、このつぎ喉に鬼が憑いたら、石段から身投げしようと思う」

「川で死ぬと、水ぶくれになって、東京湾まで流れるって」

俊男は真剣になった。暗い川面を子供がふわふわ流されてゆく光景が目に見えて、怖ろしかった。

「冬なら水ぶくれにならないと思う」

「手に持つてるのは、なに」

俊男は危険なものではないかと彼女の手に握っているものを見た。赤い、欠けた櫛だった。今朝髪を梳いていて櫛の齒が欠けた。

「川に流してこようかしら。欠けた櫛はふきつだから」

冴子は立っていつて窓から外を見て、橋まで行ってみることにした。俊男はさえぎった。

「外の風は冷いよ。また風邪を引くよ」

冴子は櫛の持つ妖とわざわいを母に聞いたことがある。櫛をだしにして外へ出て試してみようと考えた。何事もなければ休んでいる学校へも行けるだろう。閉されていると滅々として、哀しい。彼女は毛足の長いオーバーを着て、赤い毛糸のマフラーを首に巻いた。俊男は止めても聞かないと知ると、ふだん病氣と闘う冴子の好きなようにさせてやろうと決めた。

駒形橋はすぐだが、一歩外へ出ると冷い風は鼻腔に刺戟的である。冴子は首を立てて歩いた。身軽で、自由だった。俊男は風よけになろうとして、彼女より大きい身体を張って歩いた。駒形橋の上へ来る。子供は橋を渡って向う側へゆくことはない。風が頬を打つが、堪えられない寒さではない。彼女は欄干から川を覗いた。冬の隅田川は凍てた眺めで、向う岸の倉庫は遠く、橋の下から蒸気船が現れて重い川の上を滑ってゆく。手にした赤い櫓を欄干に乗り出して川へ投げた。軽い櫓は落ちて川面に浮んだ。一層身を乗り出すと、俊男は彼女のオーバーの背を掴んだ。赤い櫓は重い流れに漂いながら離れていった。冴子は大川に吞まれてゆく小さい櫓を見たのであった。「帰ろう」と俊男がうながして、冴子はようやく欄干を離れた。戻ってくると、橋の際に千明が立っている。俊男はぎくりとして足を止めた。御店の子を連れ出したと見えるだろう。出過ぎたふるまいをとがめられるに違いない。千明はきつい眼差でふたりを迎えて、どうしたのかと聞いた。冴子は声を張って答えた。

「櫓が欠けたから、川へ流してきた」

「厄落しか。お嬢吉三じゃあるまいし」

千明は苦笑しながら、俊男へ、お帰り、と言った。それから不機嫌にすたすた歩き出していた。冴子は俊男に悪いことをしたと思ったが、自分でも厄落しをしたと信じた。

「寒い冬だったと思う。冴子さんとこの橋に立ったことがあった。なにをしたのかなあ」と俊男も橋の上で回想していた。

「雪見じゃなくて」

冴子ははぐらかした。彼の目に、二人の子供のいる情景だけが見えているのだ。

あの日のあと何が起きたのだったか。夜半に人が蒲団のぬくみに安らぐころ、喘息は首をもたげる。喉に痰がからまり、八方破れの笛が張り裂けるのだ。千明はせぐりあげる子供の波打つ身体を一晚中抱いて、背を撫でながら祈った。祈りは冴子の耳にも聴えた。お父さんがついているから大丈夫だ、と千明は耳許でいった。冴子の身体はひや汗で冷たくなり、苦しみは永劫続くかと思えたが、父の声と手のぬくもりが頼りであった。冴子、今にお前がもう少し大きくなったら、白い着物を着てお父さんと一緒に遠くへお詣りにゆこうなあ、と彼は祈るように繰返した。子が病むのは親の罪業なのだ。子とともに札所を巡って身を清めながら、行きつくところまで行こう、と彼は決意すると、ようやく心が静まるのだ。するうち冴子の咳も切れて、暁がきていた。

駒形から吾妻橋へ引返して、隅田公園を山谷堀へ二人は歩いた。久しぶりにこんなに自然な出会いで昔が還ってくるとは、冴子は思っていなかった。俊男とはもつとよそよそしい世間並みの顔で、取りつくろって会うとばかり考えていた。用件だけで終ってもふしぎはなかったのだ。俊男は昔から節度をなくさない人間だったし、そのやさしさでわがままな冴子をゆるしてくれたのだから。

「冴子さんは変らないですね。腺病質な子供の時分から、ある意味で自我が強かった。正直いつてあの頃東京を捨てても、すぐ帰ってくると思っていました」

「私が根性曲りなのは、子供の時分の劣等感が尾を引いているのでしょね」

「いま、平穩無事ですか」

「私ですか。平穩を求める資格はないでしょうね。親を泣かせた罰、と世間は言っていないませんか」

冴子は俊男の顔を仰いだ。

「いつ東京へ戻られましたか」

と俊男はおだやかに訊ねた。

「戦後五年目に。母の病気が重かったので、都落ちを切上げました。母を看取れたのがせめてもの幸せですね」

川の堤を歩くと、工場の廃水がそそがれるのか川はよごれて、これがいつも心に抱く東京の川かと思わせる。隅田川は昔は利根川の本流だったという。武蔵野の台地にそって流れて荒川となり、隅田川はその下流で、千住大橋から数えて十二の橋の下を流れて東京湾へそそぐ。戦後は一時白魚が棲むほど水が澄んだと聞いたが、泥っぽくにごった川は荒涼としている。

「きたなくてひどいでしょう。家にいても川の臭いが上ってきて、閉口します」

この川にも空襲の時、大勢の人間がつかったはずであった。そうして浅草の人間はおびただしく死んでいった。彼女が親も家も捨てたのは焼ける半年前であった。そして父を失った。彼女はさっきからそのことに触れて俊男に訊ねようとして、口ごもった。父にふれるには痛みがあった。

川の対岸は墨田堤で、川を遡るうち言問橋が見えてきて、やがて山谷堀の水門が現れる。水門

から引いた川は小高い待乳山聖天堂の裾をめぐってゆく。今戸橋の下に小さな舟が舫っていて、なつかしい風景である。

「ここらも変ったでしょう。今の浅草に風情のある旧い家並は残ってません。ほとんど全域焼けたから」

焼けて変ったとしても、川は流れて、大事な記憶が封じこめられているのを彼女は忘れていた。山谷堀の引き川は、昔吉原遊郭へ通う客を乗せた猪牙船ぶたがふねを日本堤まで運ぶ水路であった。細い川の岸に紺屋がある。焼ける前と同じ二階家で、開け放った硝子戸に紺ののれんが下げてある。

冴子は見上げながら、どうかしたなりゆきでこの家へ嫁にきたかもしれない、と思うと、妙な気がした。俊男は彼女を招じ入れて、土間から鉤の手になった奥の仕事場へ向けて、言った。

「山藤やまとうさんの冴子さんが見えた」

山藤は彼女の生家の屋号であった。俊男の妻が帳場へ迎えに出て、丁寧に挨拶した。二十八、九の下町の女らしく愛嬌のある、働き者らしいひとだった。冴子は二階座敷へ通された。窓から川が見える。扇風機がゆるく廻った。俊男の妻が二歳ぐらいの男の児をつれてお茶を運んできた。男の児は目許が俊男に似ていた。

「可愛いお子さんですね」

冴子と呼ぶと、児ははにかんで母親にまつわった。俊男は黙って子供の顔を見ている。歳月が確固として冴子と彼の間に流れているのを感じる。その間幸せだったと言えるか、不幸だったと言えるべきか。お茶をいただいていると、階段口から小磯元吉が上ってきた。今まで仕事をしてい